公益の風 #38

東北公益文科大学大学院 公益学研究科 修了生
鶴岡市職員
佐藤　祐

地域で育てる「未来の大人」たち

今の子どもは未来の大人です。地域の将来を担う若者たちを地域で見守り育て、地域で活躍できるような環境を整えることが、大人の責務であると思います。

若者の自己効力感を高める

私は市職員としての業務の傍ら、東北公益文科大学大学院に在籍しました。そこで自治体が主催する「子ども議会・若者議会」の調査研究に取り組み、自治体が予算の使い道や提案内容について若者たちに委ね尊重すること、「まちづくり」として結果を出すこと以上に「ひとづくり」として考え、「最近の若者は…」「若者は大人より未熟だ」といった「若者に対する差別や偏見」を取り除いて取り組んでいること、が共通しています。さらに、少年議会や若者議会に参加した若者が、活動の中で考え方が変わり、地元に貢献したいという思いが強くなった、という意見も多くあったのです。

大人が若者に対して差別や偏見がある状態だと、若者は徐々に「大人は自分たちのことを信じてくれない」「自分には何もできない」と考え、大人に対して不信感を募らせていき、まちづくりにかかわる意欲を失っていきます。若者と大人の信頼関係が構築され、若者の提案や提言が形になる経験をすることで、自己効力感や地域への愛着が高まり、地域のまちづくりに対する意欲が高まっていくことが考えられます。

また、私は大学院在籍中に「ファシリテーション」という、会議や話し合いの場で多様な参加者の対話を引き出すことができるスキルを身につけた「地域共創コーディネーター」の認定を受け、活動しています。ファシリテーションの考え方に基づいた対話の場では、大人も子どもも、年齢や立場などに関係なく、お互いの意見を尊重し合いながら話し合いを進めていきます。地域の様々な話し合いの場に子どもや若者が参加し、政策にかかわる予算を提案することができます。どちらの事例でも、行政が予算の使い道や提案内容について若者に委ね尊重すること、「まちづくり」として結果を出すこと以上に「ひとづくり」として考え、「最近の若者は…」「若者は大人より未熟だ」といった「若者に対する差別や偏見」を取り除いて取り組んでいること、が共通しています。さらに、少年議会や若者議会に参加した若者が、活動の中で考え方が変わり、地元に貢献したいという思いが強くなった、という意見も多くあったのです。

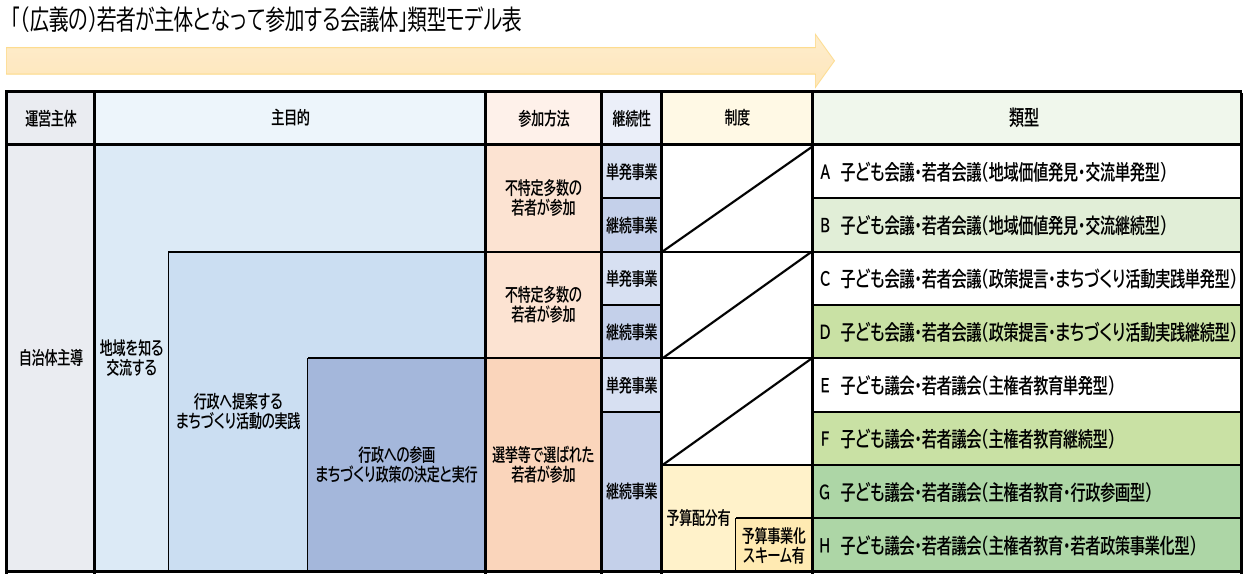
大人が若者に対して差別や偏見がある状態だと、若者は徐々に「大人は自分たちのことを信じてくれない」「自分には何もできない」と考え、大人に対して不信感を募らせていき、まちづくりにかかわる意欲を失っていきます。若者と大人の信頼関係が構築され、若者の提案や提言が形になる経験をすることで、自己効力感や地域への愛着が高まり、地域のまちづくりに対する意欲が高まっていくことが考えられます。

また、私は大学院在籍中に「ファシリテーション」という、会議や話し合いの場で多様な参加者の対話を引き出すことができるスキルを身につけた「地域共創コーディネーター」の認定を受け、活動しています。ファシリテーションの考え方に基づいた対話の場では、大人も子どもも、年齢や立場などに関係なく、お互いの意見を尊重し合いながら話し合いを進めていきます。地域の様々な話し合いの場に子どもや若者が参加し、意見を言える環境があることも、自己効力感や地域への愛着が高まる要素になるのではないかと考えています。

大人になっても暮らしたいまちに

私は現在、鶴岡市役所の若手職員有志で構成する「鶴岡WBCプロジェクト」に参加しています。若者の視点から、既存の枠組みにとらわれない政策提言や立案を行うことが目的です（奇しくも昨年度はこのプロジェクトから「こども会議」が提案され、事業化されることになりました）。大学院で学んできた経験を存分に活かし、若者が大人と同じ立場で意見交換をしたり行政に関わったりできる、そして大人になっても鶴岡で暮らしたいと思える、安心して暮らすことができるまちの実現に向けて取り組んでいきます。

「(広義の)若者が主体となって参加する会議体」類型モデル表



筆者作成の「子ども議会・若者議会類型化モデル」。下へ行くほど、若者が行政に参画するレベルが高い。

荘内日報社「敬天愛人」2024年9月号(Vol.186)掲載